

動詞「満つ・満たす」の格体制

—上代から中世まで—

The Case Structure of "Mitsu (Mitasu)":
From Old to Middle Japanese

川野 靖子*

KAWANO, Yasuko

本稿では、上代～中世の資料を対象として自動詞「満つ」及び他動詞「満つ（満たす）」の格体制を調査し、現代語の「満ちる」「満たす」とは異なる、以下の特徴を明らかにした。

①現代語の「満ちる」は、事物主語文型（e.g., グラスに水が満ちる）でも空間主語文型（e.g., グラスが水で満ちる）でも用いられる。これに対し、上代～中世の調査資料では、空間主語文型での自動詞「満つ」の使用がほとんど見られない。

②現代語の「満たす」は、事物目的語文型（e.g., グラスに水を満たす）でも空間目的語文型（e.g., グラスを水で満たす）でも用いられる。これに対し、上代～中世の調査資料では、空間目的語文型の用例が見られず、加えて、少なくとも中世前期までは事物目的語文型の用例も少ない。すなわち、他動詞「満つ（満たす）」が「隙間なくいっぱいにする」という意味で使用されることが、そもそも少ない。

現代語の「満ちる」「満たす」は格体制の交替（文型の交替）を起こすが、かつての日本語ではどうだったのかを調査し、変化の時期や背景を明らかにした研究は見られない。本稿は、これらの問題を明らかにするための基礎調査として位置づけられる。

キーワード：壁塗り代換、文型、歴史的変化

1. はじめに

本稿は、上代から中世までの資料を対象として、自動詞「満つ」及び他動詞「満つ（満たす）」が、どのような格体制をとっていたのか（どのような文型で出現していたのか）を調査するものである。以下で、なぜこのような調査を行うのかについて述べたい。

現代日本語においては、「満ちる」は「隙間なくいっぱいになる」という出来事を表す際、(1a)のような格体制と(1b)のような格体制をとることができる。

(1) a. グラスに水が満ちる

b. グラスが水で満ちる

* かわの・やすこ、埼玉大学大学院人文社会科学研究所教授、日本語学

「隙間なくいっぱいになる」という出来事には、空間（ここでは「グラス」）と、その中に存在するようになる事物（ここでは「水」）とが含まれるが、(1a)は、事物に当たる「水」を主語として「水がどこに存在するようになるか」という捉え方で出来事を述べる文であり、「水」の位置変化を表す文である。これに対し(1b)は、空間に当たる「グラス」を主語として「グラスの状態がどうなるか」という捉え方で出来事を述べる文であり、「グラス」の状態変化を表す文である。以下本稿では、(1a)のような文を「事物主語文型」と呼び、(1b)のような文を「空間主語文型」と呼ぶことにする。

- (2) a. グラスに水が満ちる（事物主語文型）
- b. グラスが水で満ちる（空間主語文型）

同様のことが、「満ちる」に対応する他動詞「満たす」でも観察される。次の(3)が示すように、「満たす」も、「隙間なくいっぱいにする」という出来事を表す際、事物に当たるものを目的語とする(3a)のような文型（以下、事物目的語文型）と、空間に当たるものを目的語とする(3b)のような文型（以下、空間目的語文型）をとることができる¹。

- (3) a. グラスに水を満たす（事物目的語文型）
- b. グラスを水で満たす（空間目的語文型）

以上のように、現代日本語の「満ちる」「満たす」は、「隙間なくいっぱいになる」「隙間なくいっぱいにする」という出来事を表す際、事物主語（目的語）文型と空間主語（目的語）文型の2通りの表し方を持つが、過去の日本語においてはどうだったのだろうか。仮に、過去には片方の文型でしか使われなかったのが途中から現代語のように変化したのだとしたら、それはいつ頃、どのように変化したのであり、その変化の背景には何があったのだろうか。管見の限り、これらの点を明らかにした研究は見られない。そこで本稿では、これらの問題を明らかにするための基礎調査として、上代から中世までの資料を対象に、当該動詞の使用状況を調査する。

2. 先行研究

動詞の格体制について歴史的な観点から論じた研究には、信太(1981)、林(1999)、山西(2007)、小田(2012)(2013)、杉山(2018)等があるが、このうち、自動詞「満ちる（満つ）」の格体制については林(1999)に言及がある²。

林(1999)は、「レモンはビタミンCに富む」「自信に満ちている」「情熱にあふれる」「迫力に欠ける」のような「二格をとる言い回し」がいつ頃から出現するようになったのかを調査した

¹ (1)～(3)のような格体制の交替現象は、壁塗り代換（あるいは「壁塗り交替」等）と呼ばれている。現代日本語の壁塗り代換に関する詳細は、奥津(1981)、川野(2021)等を参照のこと。

² なお、格体制についての研究ではないが、「満ちる」「満たす」の活用の変遷について論じた研究に、宮地(1958)、三浦(1969)がある。

研究である。これらの表現は、本稿のいう空間主語文型の1つに当たる（空間主語文型は、「グラスが水で満ちる」「彼は自信に満ちている」のように、事物（水、自信）を表示する格助詞の種類に関していくつかのバリエーションがある。林(1999)は、空間主語文型の中でも、事物が二格で表示されるタイプを扱った研究として位置づけられる³。林(1999)は「満ちる(満つ)」について、このような文型をとっている用例は近代以前の資料では2例しか見出せず、それが近代になると急増すると述べている⁴。

林(1999)の調査から、「彼は自信に満ちている」のような表現は近代以降に一般化した新しい表現であることが窺える。しかし、前述のように林(1999)は、本稿のいう空間主語文型の中でも「空間ガ事物ニ」という文型についての研究であり、「グラスが水で満ちる」のような表現も含めた空間主語文型全体を調査したものではない。そのため、「空間ガ事物ニ満ちる」という表現が新しいのか、それとも「満ちる」においては空間主語をとること自体が新しいのか、という点は明らかになっていない。また、他動詞は研究対象とされていないため、「満たす」の文型がどうだったのかも明らかになっていない。

そこで本稿では、上代から中世までを対象に自動詞「満つ」と他動詞「満つ(満たす)」の用例を調査し、これらの動詞がどのような文型で用いられていたのかを明らかにする。

3. 調査の概要

3.1. 調査資料と調査方法

調査には、国立国語研究所『日本語歴史コーパス』を使用した。調査範囲は、『奈良時代編 I 万葉集』、『平安時代編』の古今和歌集を除く15作品、『鎌倉時代編 I 説話・随筆』の今昔物語集を除く4作品、『鎌倉時代編 II 日記・紀行』、『鎌倉時代編 III 軍記』、『室町時代編 I 狂言』、『室町時代編 II キリシタン資料』である。「中納言」の短単位検索により、次の(4)の条件で検索した⁵。

- (4) a. キー 語彙素読み「ミツ」、品詞大分類「動詞」
- b. キー 語彙素読み「ミチル」
- c. キー 語彙素読み「ミテル」
- d. キー 語彙素読み「ミタス」

³「彼は自信に満ちている」のような文における「彼」を「空間」と呼ぶことに違和感を持つ人もいるかもしれない。しかしこの文は、「彼」を空間に見立て、そこに「自信」が隙間なくいっぱいであると述べることによって比喩的に自信満々な様子を述べた文であるため、空間主語文型に該当する。「彼は自信に満ちている(空間主語文型)」に対応する事物主語文型は、「彼には自信が満ちている」である。この種の交替現象に関する詳細は、川野(2018)(2021)等における「満ち欠け代換」の議論を参照のこと。

⁴林(1999)の挙げている近代以前の2例は、「年、進具に満(ち)」（東大研究室蔵『恵果和尚之碑文』）と「年進具ニ満ち」（高山寺蔵『恵果和尚之碑文』）である（林1999, p.431を参照のこと）。しかし、これらの用例の「満つ」は、「隙間なくいっぱいになる」という意味ではなく、「年齢がある区切りに達する」という意味（3.2.で後述する(5)の④の意味）なのではないかと思われる。4節で述べるように、本稿の調査では空間主語文型の用例は上代から中世までの資料を通してほとんど見られず、また、「空間(ガ)事物ニ満つ」という形の空間主語文型の用例は一例も見られなかった。

⁵(4a)により「満つ(四段)」の用例が得られ、(4b)により「満つ(上二段)」と「満ちる」の用例が得られる（ただし調査資料中に「満ちる」の用例は見られなかった）。また、(4c)により「満つ(下二段)」と「満てる」の用例が得られ、(4d)により「満たす」の用例が得られる（ただし調査資料中に「満てる」の用例は見られなかった）。

また、上記の『日本語歴史コーパス』の調査に加えて、『宇津保物語』『今昔物語集』⁶『今鏡』『水鏡』『沙石集』『延慶本平家物語』『太平記』『増鏡』『天草版金句集』『ぎやどぺかどる』『どちりなきりしたん』『こんてむつすむん地』『懺悔録』『醒睡笑』『きのふはけふの物語』『狂言六義』を調査した（使用テキストを稿末に示す）⁷。

なお、複合動詞の用例（e.g., 満ち満ち、入れ満ち）は除外した（ただし複合動詞については別途、5節で言及する）。また、漢文の用例も除外する。

当該動詞の表記には「満」「盈」「充」等があるが、用例を引用する場合を除き、本文中での表記は「満」で代表させて記す。

3.2. 用例の分類

自動詞「満ち」及び他動詞「満ち（満たす）」は、「隙間なくいっぱいになる」「隙間なくいっぱいにする」という意味の他にもいくつかの意味を持つ。本稿では、調査で得られた用例を以下の(5)及び(6)のように分類した⁸。なお、本稿の調査においてポイントとなるのは、その用例が(5)の①の意味（隙間なくいっぱいになる）あるいは(6)の①の意味（隙間なくいっぱいにする）の用例であるかどうかである。

(5) 自動詞「満ち」の意味分類

①隙間なくいっぱいになる。

(a) 火焰屋形にみち、くろ煙りおほひ、 (『虎明本狂言集』40- 虎明 1642_02015,3360)

②満潮になる。潮位が上がる。⁹

(b) 「潮満ちぬ。風も吹きぬべし」とさわげば、 (『土佐日記』20- 土佐 0934_00001,12570)

③満月になる。

(c) 月満ちては欠け、物盛りにしては衰ふ。 (『徒然草』30- 徒然 1336_01083,1230)

④数量や年齢がある区切りに達する。満期になる。

(d) 齢すでに五十に満ちぬ。 (『とはずがたり』30- とは 1306_01005,11540)

⑤願いなどが叶う。満足する。

(e) 若君、国の母となりたまひて、願ひ満ちたまはむ世に、住吉の御社をはじめ、はたし申したまへ。 (『源氏物語』20- 源氏 1010_00034,357470)

⁶『今昔物語集』は『日本語歴史コーパス』にも収録されているが、その範囲は本朝部のみとなっている。本稿では『今昔物語集』（新日本古典文学大系、岩波書店）を調査に用い、天竺部・震旦部も調査範囲とした。

⁷なお、『虎明本狂言集』については、『日本語歴史コーパス』による調査とともに、『大蔵虎明能狂言集翻刻註解』（大塚光信編、清文堂）、『大蔵虎明本狂言集の研究』（池田廣司・北原保雄著、表現社）、『大蔵虎明本狂言集総索引』（北原保雄他編、武蔵野書院）により用例を確認した。その結果、『日本語歴史コーパス』の検索で得られなかった用例も調査結果に加えている。詳細は注15を参照のこと。

⁸(5)(6)の意味分類は、『日本国語大辞典』『時代別国語大辞典上代編』『時代別国語大辞典堂町時代編』等を参考にして本稿の筆者が分類したものである。また、(5a～h)及び(6a～c)に挙げた用例は、本稿の調査で得られた用例である。

⁹本稿では「②満潮になる。潮位が上がる」を「①隙間なくいっぱいになる」とは別の意味と考えたが、両者は連続的であるため、②の用例を①に含めるという考え方もあるだろう。その場合は、事物主語文型の用例の割合が増えることになる。よって、②の用例を①に含めたとしても、後述する本稿の結論（上代～中世後期の資料において、「隙間なくいっぱいになる」ことを表す自動詞「満ち」の用例は、大半が事物主語文型であり、空間主語文型の用例はほとんど見られない）に支障はない。

⑥達成される。終わる。

(f) 虚しく行ひて、みちて帰るとて、ものも知らぬもの因果の道理も知り、迷悟・凡聖の差別も知る事、大切なり。(『沙石集』 p.305)

⑦完全な状態になる。十分な状態になる。

(g) 天道盈てるを欠くの理、逃るところ無し。(『太平記』上, p.171)

(h) 高しと言へども危ふからず、満てりと言へども溢さず。¹⁰ (『太平記』上, p.3)

(6) 他動詞「満つ (満たす)」の意味分類

①隙間なくいっぱいにする。

(a) 王ノ御身ニ千所ノ疵ヲ彫テ、其レニ完ノ油ヲ満テテ (『今昔物語集』1, p.418)

②願いなどを叶える。満足させる。

(b) いでや、その本尊、願ひ満てたまふべくはこそ尊からめ、(『源氏物語』20- 源氏 1010_00050,132430)

③達成する。成し終える。

(c) 昼夜ニ法花経ヲ読誦シ、寤寐ニ弥陀の念仏ヲ唱へテ、百万返ヲ満タル事数百度也。(『今昔物語集』3, p.441)

4. 調査結果

本節では用例調査の結果を、上代、中古、中世前期、中世後期に分けて見ていく。

1 節で述べたように、本稿が注目するのは、自動詞「満つ」や他動詞「満つ (満たす)」が「隙間なくいっぱいになる」「隙間なくいっぱいにする」という意味 (= (5)(6) の①の意味) で用いられる際に、どのような文型をとるか、という点である。そこで、調査結果の提示にあたっては、各資料における自動詞「満つ」、他動詞「満つ (満たす)」のそれぞれの総数と、①の意味での文型別の用例数のみを示すこととし、①以外の意味の用例数の内訳については省略する¹¹。

4.1. 上代

上代の調査結果を表1に示す。

表1 上代	【自動詞】			【他動詞】		
	隙間なくいっぱいになる		「満つ」 総数	隙間なくいっぱいにする		「満つ(満たす)」 総数
	事物主語	空間主語		事物目的語	空間目的語	
万葉集	6	0	19	0	0	0

¹⁰ 本稿では(5h)のような用例を「⑦完全な状態になる。十分な状態になる」に分類したが、「①隙間なくいっぱいになる」に分類することも考えられる。このような用例は、調査資料中、(5h)を含めて5例見られた。ただし、いずれの用例も「満つ」の格成分が出現しておらず、文型が判別できないため、①に分類したとしても「文型不明」として集計されることになる。よって、事物主語文型及び空間主語文型のそれぞれの用例数は変わらない。

¹¹ 他動詞が上代・中古の資料で見られるとすれば、「満たす」ではなく「満つ」の形であると思われるが(宮地 1958を参照のこと)、本稿では便宜上、「満つ (満たす)」という表記に統一して示す。

【自動詞】

自動詞「満つ」の用例の総数は19例であり、うち6例が「隙間なくいっぱいになる」という意味で用いられていた。これら6例は全て事物主語文型であり、空間主語文型は見られなかった。以下に用例を挙げる。

事物主語文型（全6例）

- (7) 神代より生れ継ぎ来れば人さには国には満ちて（人多国尔波満而）
（『万葉集』485、10- 万葉 0759_00004,550）
- (8) 人さには満ちてはあれども（人佐播尔満亘播阿礼等母）
（『万葉集』894、10- 万葉 0759_00005,42810）
- (9) 磯城島の大和の国に人さには満ちてあれども（山跡之土丹人多満而雖有）
（『万葉集』3248、10- 万葉 0759_00013,17430）
- (10) かけまくもあやに恐し藤原の都しみみに人はしも満ちてあれども（藤原王都志弥美尔人下満雖有）
（『万葉集』3324、10- 万葉 0759_00013,62340）
- (11) 伎波都久の岡のくくみら我摘めど籠にも満たなふ（故尔毛美多奈布）背など摘まさね
（『万葉集』3444、10- 万葉 0759_00014,29190）
- (12) 聞こし食す四方の国には人さには満ちてはあれど（四方国尔波比等佐波尔美知亘波安礼杼）
（『万葉集』4331、10- 万葉 0759_00020,9960）

【他動詞】

他動詞「満つ（満たす）」の用例は見られなかった¹²。

上代の調査資料は、『万葉集』のみということもあり、明確な傾向を指摘しにくい。先に挙げた(7)～(12)の用例についても、典型的と思われる表現に偏っているだろう(6例中5例が「人さには満ちて」及びそれに類する表現である)。しかし、後述する中古以降の調査結果を踏まえた上で、改めて上代の調査結果を見てみると、一定の傾向は指摘できると思われる。次の4.2.では中古の調査結果について見ていきたい。

¹²『日本語歴史コーパス』で「語彙素読み「ミテル」」を検索すると、次の用例がヒットする。

(i) 君に恋ふれば天地に言を満てて（天地満言）恋ふれかも（『万葉集』3329、10- 万葉 0759_00013,69390）

しかし、新編日本古典文学全集『萬葉集』3、p.442の頭注に「原文「天地満言」とあり、誤字説を含めて訓義に諸説があるが、文字に忠実な案を採る」（下線は本稿筆者）とあることを踏まえ、用例から除外した（なお、『萬葉集』（塙書房）では、「天地に言を足らはし」（訳文篇、p.367）としており、「満つ」とはしていない）。この用例の扱いについては、本稿の注19も参照のこと。

4.2. 中古

中古の調査結果を表2に示す。

表2 中古

	【自動詞】		「満つ」 総数	【他動詞】		「満つ(満 たす)」 総数
	隙間なくいっぱいになる 事物主語	空間主語		隙間なくいっぱいにする 事物目的語	空間目的語	
竹取物語	0	0	0	0	0	0
伊勢物語	0	0	1	0	0	0
土佐日記	0	0	1	0	0	0
大和物語	1	0	1	0	0	0
平中物語	0	0	3	0	0	0
蜻蛉日記	0	0	0	0	0	0
宇津保物語	5	0	16	0	0	2
落窪物語	0	1	1	0	0	0
枕草子	1	0	2	0	0	0
源氏物語	10	0	14	0	0	2
和泉式部日記	0	0	0	0	0	0
紫式部日記	0	0	0	0	0	0
堤中納言物語	0	0	0	0	0	0
更級日記	0	0	0	0	0	0
大鏡	1	0	1	0	0	0
讃岐典侍日記	0	0	0	0	0	0
計	18	1	40	0	0	4

【自動詞】

「隙間なくいっぱいになる」という意味で用いられている自動詞「満つ」の用例は全部で19例見られた。うち18例が事物主語文型であり、空間主語文型は『落窪物語』の1例に留まる。以下にそれぞれの用例を挙げる。

事物主語文型（18例のうちの一部を示す。）

(13) あらたまの年は経ねども猿沢の池の玉藻はみつべかりけり

(『大和物語』20- 大和 0951_00001,28580)

(14) この山をみしめて、おそろしげにいかきものども、ひと山にみちて、(『宇津保物語』p.74)

(15) ろうのめぐりはまましてさまざまにめづらしう、かうばしきかみちたり。

(『宇津保物語』p.1833)

(16) 「雪なにの山に満てり」と誦したるは、(『枕草子』20- 枕草 1001_00174,4090)

(17) ののしりて詣でたまふ人けはひ渚に満ちて、(『源氏物語』20- 源氏 1010_00014,81720)

(18) そこらの灰の鬢のわたりにも立ちのぼり、よろづの所に満ちたる心地すれば、

(『源氏物語』20- 源氏 1010_00031,60930)

(19) 二条の大路の、つぶと煙満ちたりしさまこそめでたく、

(『大鏡』 20- 大鏡 1100_02011,165480)

空間主語文型 (全 1 例)

(20) 上には、唐櫃の大きさに、満ちたる幣袋、中に扇百入れて、うちおほひたまへり。

(『落窪物語』 20- 落窪 0986_00004,183710)

【他動詞】

他動詞「満つ(満たす)」の用例は全部で 4 例確認できるが、いずれも、先の (6b) のような「願いなどを叶える。満足させる」という意味の用例であり、「隙間なくいっぱいにする」という意味の用例は見られなかった(事物目的語文型も空間目的語文型も見られなかった)。

4.3. 中世前期

中世前期の調査結果を表 3 に示す。

表3 中世前期

【自動詞】

【他動詞】

	隙間なくいっぱいになる			「満つ」 総数	隙間なくいっぱいにする			「満つ(満 たす)」 総数
	事物主語	空間主語	不明		事物目的語	空間目的語	不明	
今昔物語集	70	0	2	131	6	0	1	26
今鏡	1	0	0	5	0	0	0	0
水鏡	3	0	0	3	0	0	0	0
方丈記	2	0	0	2	0	0	0	0
宇治拾遺物語	2	0	0	3	0	0	0	0
十訓抄	4	0	0	7	0	0	0	2
沙石集	4	2	0	11	1	0	0	9
徒然草	0	0	0	4	0	0	0	0
海道記	3	0	0	4	0	0	0	0
建礼門院 右京大夫集	1	0	0	2	0	0	0	0
東関紀行	0	0	0	2	0	0	0	0
十六夜日記	0	0	0	1	0	0	0	0
とほずがたり	0	0	0	3	0	0	0	0
保元物語	0	0	0	1	0	0	0	0
平治物語	1	0	0	1	0	0	0	0
高野本平家物語	4	0	0	8	0	0	0	3
延慶本平家物語	10	0	0	23	0	0	0	3
太平記	35	0	0	45	0	0	0	1
増鏡	1	0	0	6	0	0	0	1
計	141	2	2	262	7	0	1	45

と比べると、極めて少ない（しかも、この2例は同じ作品の同じ箇所である）。

この他、「隙間なくいっぱいになる」という意味の用例ではあるものの、事物主語文型なのか空間主語文型なのか判別し難い用例を「不明」として分類した。該当するのは次の2例である。

不明（全2例）

(34) 三日講ジテ畢給フ夜、天ヨリ蓮華雨レリ。花ノ広サ三尺、地ノ上三四寸満テリ。

（『今昔物語集』3, p.8）

(35) 臭キ香狭キ奄満タリ。

（『今昔物語集』3, p.421）

(34) は地上一面に花が降り積もったという意味であるが、「満テリ」の主語が「花」なのか「地ノ上」なのか、はっきりしない。また(35)は、「臭キ香狭キ奄ニ満タリ」という事物主語文型である可能性が高いと思われるが、格助詞が現れていないため、「不明」として分類した。なお、仮にこの「不明」の2例が空間主語文型であったとしても、事物主語文型の用例（141例）に比べて空間主語文型の用例が僅かであることは変わらない。

【他動詞】

「隙間なくいっぱいにする」という意味で用いられている他動詞「満つ（満たす）」の用例が8例見られた。うち7例が事物目的語文型、1例が文型不明であり、空間目的語文型は見られなかった。以下に用例を挙げる。

事物目的語文型（全7例）

(36) 若シ出家ニ非ハ、転輪聖王トシテ四天下ニ七宝ヲ満テ

（『今昔物語集』1, p.5）

(37) 地神、七宝ノ瓶ヲ以テ其ノ中ニ蓮花ヲ満テ、

（『今昔物語集』1, p.28）

(38) 汝ハ七宝ヲ天下ニ満テ、世間ヲ恣ママニスト云ヘドモ、

（『今昔物語集』1, p.256）

(39) 諸ノ財宝ヲ運テ山ニ成シ、馬・牛・羊等ヲ谷ニ満テ、

（『今昔物語集』1, p.322）

(40) 王ノ御身ニ千所ノ疵ヲ彫テ、其レニ完ノ油ヲ満テテ

（『今昔物語集』1, p.418）

(41) 身ニ千所ノ疵ヲ彫テ、其レニ完ノ油ヲ満テテ、

（『今昔物語集』1, p.419）

(42) 寒山子の云はく、「千金の宝を満つと云ふとも、林下の貧にはしかじ」。 （『沙石集』p.505）

不明（全1例）

(43) 亦、方ナル石ヲ磨テ、其ノ面ニ、更ニ経ノ文ヲ写シテ、諸ノ室ノ内ニ納ム。如此ク室毎ニ満テ、石ヲ以テ戸ヲ塞グ。

（『今昔物語集』2, p.161）

(43) は、「満テ」の目的語が「方ナル石」なのか（つまり、石を満たしたのか）、それとも「室」なのか（室を（石で）満たしたのか）、判然としない。そのため「不明」として分類した。

上代・中古の調査資料中に「隙間なくいっぱいにする」という意味を表す他動詞「満つ（満

たす)」の用例が確認できなかったことを踏まえると、中世前期の調査資料に上記(36)～(43)のような用例が見られることは注目される。ただし、用例数は8例であり、同じ調査資料中に「隙間なくいっぱいになる」ことを表す自動詞「満つ」の用例が145例あるのに比べると、僅かである。

なお、前述のように、「隙間なくいっぱいにする」という意味を表す他動詞「満つ(満たす)」の用例8例の中に、空間目的語文型の確例は見られなかった。これは、先に見た自動詞「満つ」の使用状況(事物主語文型が大半を占め、空間主語文型の確例は見出せない)と一致する。

4.4. 中世後期

中世後期の調査結果を表4に示す。

表4 中世後期

	【自動詞】		「満つ」 総数	【他動詞】		「満つ(満たす)」 総数
	隙間なくいっぱいになる 事物主語	隙間なくいっぱいにする 空間主語		隙間なくいっぱいにする 事物目的語	隙間なくいっぱいにする 空間目的語	
天草版伊曾保物語	0	0	0	0	0	0
天草版平家物語	0	0	1	0	0	0
天草版金句集	0	0	5	0	0	0
ぎやどぺかどる	3	0	5	4	0	9
どちりなきりしたん	0	0	0	0	0	0
こんてむつすむん地	1	0	2	1	0	2
懺悔録	0	0	0	0	0	0
醒睡笑	1	0	1	0	0	0
きのふはけふの物語	0	0	1	0	0	0
虎明本狂言集	3	0	4	0	0	0
狂言六義	0	0	3	0	0	0
計	8	0	22	5	0	11

【自動詞】

自動詞「満つ」の用例は全部で22例あり、うち8例が「隙間なくいっぱいになる」という意味で用いられていた。8例とも事物主語文型であり、空間主語文型は見られない。以下に用例を挙げる。

事物主語文型(全8例)

(44) 萬宝蔵にみつといふとも (『ぎやどぺかどる』1, 本文編本文 p.41)

(45) 淫乱の邪なる望み、悪口讒言嘖り嫉みの科ばかりをもても世界にみつる程なるべきに、
(『ぎやどぺかどる』1, 本文編本文 p.157)

(46) 蚊の聲耳にみてるをだにも堪難して (『ぎやどぺかどる』1, 本文編本文 p.163)

(47) もし又なんぎ心ぐるしき事のみちたるところあるといはば、(『こんてむつすむん地』 p.275)

- (48) 奇なる哉妙なる哉と讚嘆する人ちまたにみてり (『醒睡笑』p.117)
 (49) 火焰屋形にミち、くろ煙りおほひ、 (『虎明本狂言集』40- 虎明 1642_02015,3360)
 (50) 天下ニ弥満、ハビコリ、ミツル、草ノ葉ノ蔓ハビコル (『虎明本狂言集』下, p.371)¹⁵

【他動詞】

他動詞「満つ（満たす）」の用例は全部で11例あり、うち5例が「隙間なくいっぱいにする」という意味で用いられていた¹⁶。5例とも事物目的語文型であり、空間目的語文型は見られない。以下に用例を挙げる。

事物目的語文型（全5例）

- (51) 御身の御誉れを終日謳ひ奉る為にわが口に御誉れを充せ給へと、
 (『ぎやどぺかどる』1, 本文編本文 p.92)
 (52) 終日御身の御誉れを歌ひわが口に御誉れを充せ給へ (『ぎやどぺかどる』1, 本文編本文 p.92)
 (53) 汝があにまに光を充せ給ふべし (『ぎやどぺかどる』1, 本文編本文 p.211)
 (54) 終日御身の御誉を謳ひ奉るべき為にわが口に御誉を満せ給へと、
 (『ぎやどぺかどる』1, 本文編本文 p.566)
 (55) わが心に御身のがらさをみたせたまへ。 (『こんてむつすむん地』p.301)

4.3. で述べたように、中世前期の調査資料では、「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞「満つ（満たす）」の用例が確認できたものの、「隙間なくいっぱいになる」ことを表す自動詞「満つ」の用例数と比べると僅かであった。一方、中世後期の場合は、資料の分量が少なく、全体の用例数自体が少ないため、「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞の使用が中世前期よりも増えたのかどうかを表4の調査結果から判断することは難しい。ただし、「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞の用例は、次のように『日葡辞書』にも見られる。

(56) Michi, tçuru, ita. ミチ, ツル, チタ (満ち, つる, ちた)

一杯になる。¶ Xiuoga mitçuru. (潮が満つる) 潮が満ちる。¶ Curani tacarauo mitçuru. (蔵に財を満つる) 倉庫を財宝で一杯にする。¶ Xemino coyega mimini mitçuru. (蟬の声が耳に満つる) 蟬の声が耳を聳する。

(『邦訳日葡辞書』 pp.401-402)

¹⁵ (50) は上欄の書き入れの箇所用例である。『日本語歴史コーパス』の検索では得られなかったが、『大蔵虎明能狂言集翻刻註解』（大塚光信編、清文堂）及び『大蔵虎明本狂言集の研究』（池田廣司・北原保雄著、表現社）にて確認し、用例に含めることとした。挙例は『大蔵虎明能狂言集翻刻註解』による。

¹⁶ ただし、これらの5例が他動詞の用例であるかどうかについては検討を要する。『キリシタン版ぎやどぺかどる本文・索引』（豊島正之編、清文堂）は、(51)～(54)のような「充／満せ給」について、一応「ミタサセ」と読んでおくとした上で、下二段ミタスの「ミタセ」である可能性にも言及している（第1冊本文篇注 p.15 を参照のこと）。これらの場合は、いずれにしても他動詞として位置づけていることになるだろう。一方、別の可能性として、「自動詞四段「満つ」＋使役「す」の「ミタセ」である可能性も残ると思われる。しかしその場合も、実質的には他動詞と同様の意味を表すと考えられるため、本稿でも(51)～(54)を他動詞に分類した。したがって、厳密に述べれば、(51)～(54)は「他動詞の用例」ではなく「他動詞相当の用例」である可能性がある。(55)についても同様である。

上記(56)の『日葡辞書』の記述には、「Curani tacarauo mitçuru. (蔵に財を満つる)」という他動詞の用例が見られる¹⁷。このことは、「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞「満つ(満たす)」の使用が、当時ある程度定着していた可能性を窺わせるが、この点についての結論は保留としたい。

なお、前述のように、中世後期の調査資料において、空間主語文型や空間目的語文型の用例は見られなかった。『日葡辞書』の記述でも、事物主語文型の自動詞文(蟬の音が耳に満つる)や事物目的語文型の他動詞文(蔵に財を満つる)の用例は見られるが、空間主語文型や空間目的語文型の用例は見られなかった¹⁸。

4.5. 調査結果のまとめ

4.1. で述べたように、上代については表1の調査結果のみから明確な傾向を指摘することは難しい。しかし、改めて見てみると、表1は中古以降の調査結果と矛盾しない結果になっていることが分かる。以上を踏まえて、上代～中世後期の調査結果をまとめると、次のようになる。

(57) 自動詞「満つ」

- ・「隙間なくいっぱいになる」という意味を表す自動詞「満つ」の用例は上代～中世後期の調査資料を通して見られるが、その大半が事物主語文型であり、空間主語文型の用例はほとんど見られない。

(58) 他動詞「満つ(満たす)」

- ・「隙間なくいっぱいにする」という意味を表す他動詞「満つ(満たす)」の用例は、上代・中古の調査資料には見られず、中世前期の調査資料でも僅かである¹⁹。
- ・上述のように、「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞「満つ(満たす)」の用例は少なく、中世前期の調査資料に僅かと中世後期の調査資料に見られるのみであるが、それらの用例はいずれも事物目的語文型であり、空間目的語文型の用例は見られない。

これらの調査結果から、現代日本語の「満ちる」「満たす」との相違点として注目されるのは次の2点である。

¹⁷ なお、「Curani tacarauo mitçuru. (蔵に財を満つる)」については、『邦訳日葡辞書』p.402において、「これは他動詞の用例で、別条 Mite, uru (満て、つる)の条下にあるべきもの」との訳注が記されている。

¹⁸ 『日葡辞書』の見出し語には「Mite, uru, eta (満て、つる、てた)」と「Mitaxi, su, aita (満たし、す、いた)」もあるが(『邦訳日葡辞書』p.411)、用例の記載はない。なお、見出し語「Tanpan (淡飯)」の箇所に「Tanpannimo vyeuo mitçubexi. (淡飯にも飢えを満つべし) たとえ悪い粗末な食事でも、私は空腹を消すであろう」(『邦訳日葡辞書』p.611)という用例があるが、これは飢えを満足させるという意味(3.2.の(6)の②に分類される意味)であり、「隙間なくいっぱいにする」という意味の用例ではないと考えられる。

¹⁹ 注12で述べたように、本稿では『万葉集』の次の用例を集計から除外した。

(i) 君に恋ふれば天地に言を満てて(天地満言)恋ふれかも (『万葉集』3329、10-万葉0759_00013,69390)
仮に、この用例の「天地満言」を新編古典文学全集『萬葉集』3, p.442の読みの通り「天地に言を満てて」と読んで用例数に含めた場合は、上代の調査資料に「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞「満つ(満たす)」の用例が1例存在することになる。しかしその場合も、中古以降の他動詞「満つ(満たす)」の使用状況を考え合わせると、上代から少なくとも中世前期までの調査資料では「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞「満つ(満たす)」の用例が少ないという点は指摘できると考えられる。また、「天地に言を満てて」は事物目的語文型であるため、この用例を加えたとしても、上代から中世後期までの調査資料を通して空間目的語文型の他動詞「満つ(満たす)」の用例が見られないという点も動かない。

(59) ①文型に偏りがあること：

事物主語（目的語）文型での使用が大半であり、空間主語（目的語）文型での使用はほとんど見られない。

②自動詞と他動詞の使用状況に非対称性が見られること：

他動詞の場合、空間目的語文型の用例が見られないだけでなく、事物目的語文型の用例も少ない。すなわち、「隙間なくいっぱいにする」という意味を表す用例が、そもそも少ない。

つまり、現代日本語では「グラスに水が満ちる」とも「グラスが水で満ちる」とも言えるが、上代～中世後期の調査資料には後者（「グラスが水で満ちる」）のような表現がほとんど見られないということである。また、現代日本語では他動詞「満たす」を「隙間なくいっぱいにする」という意味で用いるのは一般的であるが（「グラスに水を満たす」「グラスを水で満たす」等）、上代から、少なくとも中世前期までの調査資料では、他動詞「満つ（満たす）」をこのような意味で用いている用例が少ないということである。

ただし、(59)の②については、当時の他動詞「満つ（満たす）」が「隙間なくいっぱいにする」という意味を表しにくかったわけではなく、たまたま調査資料中に「隙間なくいっぱいにする」ことを述べる場面が少なかつただけである可能性も考えられる。そこで次の5節では、複合動詞の使用状況を調査することにより、この点を検討する。

5. 「隙間なくいっぱいにする」ことを表す複合動詞の使用状況

4節で述べた調査と同じ資料を対象に、「満つ（満たす）」を構成要素に含み「隙間なくいっぱいにする」ことを表す複合動詞（e.g., 入れ満つ）の使用状況を調査した²⁰。その結果を次の表5に示す（用例が見られた資料のみを示す）²¹。また、用例の一部を(60)～(67)に挙げる。

²⁰『日本語歴史コーパス』の調査の検索条件は次の通りである。

- a. キー 語彙素読み「%ミテル」 b. キー 語彙素読み「ミテ%」 c. キー 語彙素読み「%ミタス」
d. キー 語彙素読み「ミタシ%」 e. キー 語彙素読み「%ミツ」、品詞大分類「動詞」
f. キー 語彙素読み「%ミチル」 g. キー 語彙素読み「ミチ%」

このうちe～gは自動詞「満つ」「満ちる」を構成要素に含む複合動詞を検出するための条件であるが、念のため検索に加えた。上記a～gの検索を行った後、「隙間なくいっぱいにする」ことを表す複合動詞の用例を抽出した。

²¹「敷き満つ」の用例のうち、次の例は「敷き満てて」ではなく「敷き満ちて」となっているが、前後の文脈から「隙間なくいっぱいにする」という意味を表すと考えられるため、用例に加えた。

- (i) 長者、この言誠ぞと心得て、やがて数箇の倉庫を開き、黄金を大象に負ふせ、祇陀園八十頃の地に敷き満ちて、太子に、これを奉る。
（『太平記』下、p.890）

表5 「隙間なくいっぱいにする」ことを表す複合動詞の使用状況

	万葉集	宇津保物語	今昔物語集	今鏡	高野本平家物語	延慶本平家物語	太平記
敷き満つ	1		2		1	1	1
入れ満つ			2				
積み満つ		1	4				1
そそぎ満つ			1				
盛り満つ			3				
置き満つ				1			
満て置く			1				
満て閉づ			1				
計	1	1	14	1	1	1	2

- (60) 玉敷かず君が悔いて言ふ堀江には玉敷き満てて（多麻之伎美弓と）継ぎて通はむ
 (『万葉集』 4057、10- 万葉 0759_00018,7270)
- (61) 然レバ、大ナル桶ニ木ノ葉ヲ入レ満テテ、夜ハ其レニ入テ有リ。 (『今昔物語集』 3, p.178)
- (62) 我ガ父ノ有リシ時、財ヲ倉ニ積ミ満テタル事、極テ難量カリキ。 (『今昔物語集』 1, p.117)
- (63) 鉄ノ棺ニ入レテ香油ヲ以テ棺ノ中ニ灑満テヨ。 (『今昔物語集』 1, p.278)
- (64) 然レバ清キ水ヲ瓶ニ盛り満テテ、銭ヲ瓶ノ中ニ入レテ、 (『今昔物語集』 1, p.118)
- (65) いひ知らず綾錦、唐綾、唐絹、さまざまのたからもの、所なきまでぞ置き満てられ侍りけるを、 (『今鏡』 p.58)
- (66) 心ニ随テ百味ヲ運ビ備へ、珍宝ヲ満置テ、 (『今昔物語集』 1, p.86)
- (67) 微妙ノ香油ヲ以テ棺ノ内ニ満テ閉テ、 (『今昔物語集』 1, p.278)

次に、上記表5に示した複合動詞の使用状況と、4節で見た他動詞「満つ（満たす）」の使用状況を比較したい。「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞「満つ（満たす）」及び、複合動詞「～満つ」「満て～」の使用状況をまとめると、上代～中世前期については表6のようになる。また、中世後期については表7のようになる（表6、表7ともに、「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞「満つ（満たす）」もしくは複合動詞の、少なくともいずれかが見られた資料のみを示す）。

表6 「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞「満つ(満たす)」及び複合動詞の使用状況(上代~中世前期)

	隙間なくいっぱいにする	
	「満つ(満たす)」	複合動詞「~満つ」「満て~」
万葉集	0	1
宇津保物語	0	1
今昔物語集	7	14
今鏡	0	1
沙石集	1	0
高野本平家物語	0	1
延慶本平家物語	0	1
太平記	0	2
計	8	21

表7 「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞「満つ(満たす)」及び複合動詞の使用状況(中世後期)

	隙間なくいっぱいにする	
	「満つ(満たす)」	複合動詞「~満つ」「満て~」
ぎやどべかどる	4	0
こんてむつすむん地	1	0
計	5	0

上記表6の上代~中世前期の調査結果を見ると、『万葉集』『宇津保物語』『今鏡』『高野本平家物語』『延慶本平家物語』『太平記』では、「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞「満つ(満たす)」の用例が見られないものの、当該資料中に「隙間なくいっぱいにする」ことを表す場面がなかったわけではなく、そうした場面に複合動詞が出現していることが分かる²²。また、『今昔物語集』では、「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞「満つ(満たす)」の用例が7例確認されるが、複合動詞の用例はそれを上回る14例があることが分かる。

以上のことを踏まえると、4節の上代~中世前期の調査結果で、「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞「満つ(満たす)」の用例数が、「隙間なくいっぱいになる」ことを表す自動詞「満つ」の用例数に比べて極端に少なかったことは、たまたまそうであったわけではなく、当時の他動詞「満つ(満たす)」が、それ単独では「隙間なくいっぱいにする」という意味を表しにくかったことを示すのではないかと考えられる。

なお、表7の中世後期の調査結果を見ると、「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞「満つ(満たす)」の用例が計5例あるのに対し、同様の意味を表す複合動詞「~満つ」「満て~」の用例は0例である。これは、中世後期には「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞「満つ(満たす)」の使用が定着したことの表れとみることもできるかもしれないが、4.4.でも述べたように、中世後期は調査資料の分量が少ないため傾向を見定め難い。中世後期において「隙間なくいっぱいにする」という意味での他動詞「満つ(満たす)」の使用が定着していたかどうかについては、結論を保留したい。

²² 「隙間なくいっぱいにする」ことを表す場面を全て調べたわけではないため、そうした場面に他の表現(「満つ(満たす)」でも「~満つ」「満て~」でもない別の動詞等)が使われている可能性もある。ここで主張したいのは、「隙間なくいっぱいにする」ことを表す場面が全て複合動詞「~満つ」「満て~」で表されていたということではなく、そうした場面があるにもかかわらず他動詞「満つ(満たす)」が用いられていない、ということである。

6. まとめと今後の課題

本稿では、「現代日本語の「満ちる」「満たす」は事物主語（目的語）文型と空間主語（目的語）文型の2通りの文型をとるが、かつてはどうだったのか」という観点から調査を行い、上代から中世後期までの自動詞「満つ」及び他動詞「満つ（満たす）」の使用状況について以下のことを明らかにした。

(68) 自動詞「満つ」

- ・「隙間なくいっぱいになる」という意味を表す自動詞「満つ」の用例は上代～中世後期の調査資料を通して見られるが、その大半が事物主語文型であり、空間主語文型の用例はほとんど見られない。

(69) 他動詞「満つ（満たす）」

- ・「隙間なくいっぱいにする」という意味を表す他動詞「満つ（満たす）」の用例は、上代・中古の調査資料には見られず、中世前期の調査資料でも僅かである。当該資料中に「隙間なくいっぱいにする」ことを表す場面がなかったわけではなく、そうした場面に複合動詞「～満つ」「満て～」が出現していることから、当時の他動詞「満つ（満たす）」は、それ単独では「隙間なくいっぱいにする」という意味を表しにくかった可能性がある。
- ・上述のように、「隙間なくいっぱいにする」ことを表す他動詞「満つ（満たす）」の用例は少なく、中世前期の調査資料に僅かと中世後期の調査資料に見られるのみであるが、それらの用例はいずれも事物目的語文型であり、空間目的語文型の用例は見られない。

現代日本語の「満ちる」「満たす」との違いとして注目されるのは、以下の2点である。

- (70) ①空間主語文型での自動詞「満つ」の使用がほとんど見られない（すなわち、現代日本語でいう「グラスが水で満ちる」のような表現がほとんど見られない）。
- ②他動詞の場合、空間目的語文型が見られないだけでなく、少なくとも中世前期までは、「隙間なくいっぱいにする」という意味を表す「満つ（満たす）」の用例が、そもそも少ない（すなわち、現代日本語でいう「グラスを水で満たす」のような表現が見られないことに加え、「グラスに水を満たす」のような表現も少ない）。

上記(70)の①と②の間にどのような関係があるのか（あるいは、別個の事柄なのか）については、現時点では分からない。今後の課題としたい。この他、今回保留とした中世後期における他動詞「満つ（満たす）」の使用傾向について見通しを得ること、近世以降の資料の調査により自動詞「満つ（満ちる）」及び他動詞「満つ（満たす）」がいつ頃、どのような形で空間主語（目的語）文型をとるようになったのかを明らかにすること、また、その変化の背景には何があったのかを明らかにすること等が、今後の課題となる。

引用文献

- 奥津敬一郎 (1981) 「移動変化動詞文—いわゆる spray paint hypallage について—」『国語学』127, 国語学会.
- 小田勝 (2012) 「動詞「着換ふ」の格支配について」『岐阜聖徳学園大学国語国文学』31, 岐阜聖徳学園大学国語国文学会.
- 小田勝 (2013) 「中古語の動詞「換ふ」の格表示について」『表現研究』97, 表現学会.
- 川野靖子 (2018) 「「彼には積極性が欠けている」と「彼は積極性に欠けている」—満ち欠け代換の成立原理—」『埼玉大学紀要 教養学部』53-2, 埼玉大学教養学部.
- 川野靖子 (2021) 『壁塗り代換をはじめとする格体制の交替現象の研究—位置変化と状態変化の類型交替—』ひつじ書房.
- 信太知子 (1981) 「「～をそむく」から「～にそむく」へ—動作の対象を示す格表示の交替—」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究2』和泉書院.
- 杉山俊一郎 (2018) 「動詞「むくいる」の格支配について」『論輯』44, 駒澤大学大学院国文学会.
- 林謙太郎 (1999) 「「レモンはビタミンCに富む」という表現をめぐる」近代語学会編『近代語研究10』武蔵野書院.
- 三浦和雄 (1969) 「文法指導に必要な用例発見レポート(9) 満つ(四段・上二段・下二段)」『月刊文法』1-11, 明治書院.
- 宮地幸一 (1958) 「動詞「満つ・満たす」考」『國學院雑誌』59-10・11, 國學院大學.
- 山西正子 (2007) 「動詞「おおう」と格助詞」『目白大学文学・言語学研究』3, 目白大学.

調査資料・引用した資料・辞書等 (用例の引用に際し、表記の一部に手を加えている場合がある。)

- 国立国語研究所 (2017) 『日本語歴史コーパス 奈良時代編 I 万葉集』(短単位データ 1.0 / 長単位データ 1.0) <https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/nara.html#manyo>
- 国立国語研究所 (2016) 『日本語歴史コーパス 平安時代編』(短単位データ 1.1 / 長単位データ 1.1) <https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html>
- 国立国語研究所 (2016) 『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編 I 説話・随筆』(短単位データ 1.1 / 長単位データ 1.1) <https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/kamakura.html>
- 国立国語研究所 (2017) 『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編 II 日記・紀行』(短単位データ 1.0 / 長単位データ 1.0) <https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/kamakura.html#nikki>
- 国立国語研究所 (2022) 『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編 III 軍記』(短単位データ 1.0 / 長単位データ 1.0) <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/kamakura.html#gunki>
- 国立国語研究所 (2016) 『日本語歴史コーパス 室町時代編 I 狂言』(短単位データ 1.1 / 長単位データ 1.1) <https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/muromachi.html>
- 国立国語研究所 (2018) 『日本語歴史コーパス 室町時代編 II キリシタン資料』(短単位データ 1.0 / 長単位データ 1.0) <https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/muromachi.html>
- 『萬葉集』(新編日本古典文学全集、小学館)

- 『補訂版 萬葉集 本文篇』(佐竹昭広・木下正俊・小島憲之著、塙書房)
- 『萬葉集 訳文篇』(佐竹昭広・木下正俊・小島憲之著、塙書房)
- 『宇津保物語本文と索引』(宇津保物語研究会編、笠間書院)
- 『今昔物語集』(新日本古典文学大系、岩波書店)
- 『今昔物語集索引』(新日本古典文学大系別巻、岩波書店)
- 『今鏡本文及び総索引』(榊原邦彦・藤掛和美・塚原清編、笠間書院)
- 『水鏡本文及び総索引』(榊原邦彦編、笠間書院)
- 『御所本 十訓抄 宮内庁書陵部蔵』(泉基博編、笠間書院)
- 『沙石集』(新編日本古典文学全集、小学館)
- 『延慶本平家物語』(北原保雄・小川栄一編、勉誠社)
- 『土井本太平記本文及び語彙索引』(西端幸雄・志甫由紀恵編、勉誠社)
- 『増鏡』(日本古典文学大系『神皇正統記・増鏡』、岩波書店)
- 『増鏡総索引』(門屋和雄編、明治書院)
- 『天草本金句集の研究』(山内洋一郎著、汲古書院)
- 『キリシタン版ぎやどべかどる本文・索引』(豊島正之編、清文堂)
- 『どちりなきりしたん総索引』(小島幸枝編、風間書房)
- 『こんてむつすむん地』(新村出・終源一校註『吉利支丹文学全集上』朝日新聞社)
- 『こんてむつすむん地総索引』(近藤政美編、笠間書院)
- 『コリヤード懺悔録』(大塚光信翻字、風間書房)
- 『醒睡笑静嘉堂文庫蔵本文編 [改訂版]』(岩淵匡編、笠間書院)
- 『醒睡笑静嘉堂文庫蔵索引編』(岩淵匡他編、笠間書院)
- 『きのふはけふの物語研究及び総索引』(北原保雄編、笠間書院)
- 『大蔵虎明能狂言集翻刻註解』(大塚光信編、清文堂)
- 『大蔵虎明本狂言集の研究』(池田廣司・北原保雄著、表現社)
- 『大蔵虎明本狂言集総索引』(北原保雄他編、武蔵野書院)
- 『狂言六義全注』(北原保雄・小林賢次著、勉誠社)
- 『狂言六義総索引』(東京都立大学中世語研究会編・小林賢次代表、勉誠出版)
- 『邦訳日葡辞書』(土井忠生・森田武・長南実編訳、岩波書店)
- 『時代別国語大辞典上代編』(上代語辞典編集委員会編、三省堂)
- 『時代別国語大辞典室町時代編』(室町時代語辞典編集委員会編、三省堂)
- 『日本国語大辞典 第二版』(日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編、小学館)